

九大で学ぶ後輩諸君へ

Tano, Takeo

田野 武夫

拓殖大学政経学部准教授



平成16年に私は九州大学大学院文学研究科で博士号(文学)を取得し、平成19年に拓殖大学政経学部へ赴任した。18-19世紀のドイツ文学、とりわけヘルダーリンを中心に研究している。

学部、修士課程、博士課程の全てを九大で学んだ。現在の独文学研究者としての知識は、全て九大で得たものである。大学院では、テキストに寄り添う姿勢を徹底して叩き込まれた。言葉に即して語る態度は、あらゆる作品解釈の基礎となるものであり、自分の研究の土台にもなっている。

九大の独文学研究室を訪れる人の多くが、九大は活気があると言う。会員数が減少傾向にある全国組織の日本独文学会とは対照的に、九州大学独文学会の会員数はむしろ増加傾向にある。専任ポストも九州を中心とした西日本だけでなく、ここ近年は東京

でも九大出身者がポストを得る事例が増えてきた。首都圏の独文学会では、活気ある「強い九大」の認識が定着しつつある。

このような九大の強さは、のびのびと学べる環境にあると言えよう。首都圏の大学院では、必要以上に競争意識に曝され、自分を見失う者も多い。しかし九大には、切磋琢磨しながら、強い信頼で結ばれた人間関係を築く風土がある。自分自身、大学院時代は徹底的に学び、先生や先輩、後輩たちと大いに語り合った。ここで得た絆は一生続いて行くだろう。

首都圏と比べ大学数が少ない九州では、学会などの関連行事を行う人員が限られている。そのため大学院生も、学会業務や学会誌の編集作業などを頻繁にこなさなければならない。しかし、これがいい経験になるのだ。現在、拓殖大学人文科学研究所の機関誌編集委員や日本独文学会ドイツ語教育部会の幹事などを務めているが、これらの業務に主体的に取り組めるのは、九大で培った経験があるからである。

独文学研究室は、ドイツ人研究者の招待講演など国内外の様々な行事を積極的に引き受けている。これらの活動を通して大学院生は研究者、教育者としてのコミュニケーション能力を高めることができる。九大出身の若手ドイツ語教員は、全体的に授業評価が高い。研究室の高い活動力が、その一因であるのは間違いない。FDの重要度が増すにしたがって、この強みは九大の大きな追い風になるだろう。

九大からもたらされる後輩たちの活躍の知らせに、いつも勇気づけられている。九大で学ぶ学生たちが、今後もこの輝かしい伝統を引き継いで行くことを心から願っている。